

# 学園小中一貫コミュニティ・スクール導入期に関する研究 —地域連携・協働カリキュラム・マネジメントの推進を通して—

## Research Concerning the Introduction of a Community-Integrated Education Between Elementary and Junior High School —Through Promotion of a Regional Collaborative Curriculum Management—

堤 久美 ・ 森 保之

Kumi TSUTSUMI ・ Yasuyuki MORI

福岡教育大学大学院教育学研究科

福岡教育大学 教職実践講座

教職実践専攻学校運営リーダーコース

/宗像市立日の里西小学校

(令和 年 月 日受理)

### 要 約

本研究は、地域連携・協働カリキュラム・マネジメントの推進を通して、学園小中一貫コミュニティ・スクールの導入期の在り方を究明することを目的としている。そこで、学校、家庭、地域が同じ目標を共有し、各役割と責任をもって子どもの教育にあたる共育(共に育てる)文化を校区に醸成していくために、地域の教育資源を活かし、地域の課題解決につながる「日の里カリキュラム」を小中9年間の系統を整えて構成、実施した。その結果、学園運営協議会委員の当事者意識に向上が見られた。また、教員のコミュニティ・スクール導入に対する漠然とした不安を具体的な課題へと変えるとともに、地域と連携する教育活動の良さを実感し、コミュニティ・スクールの有効性を感じる教員が増えるなどの成果が見られた。

キーワード:「コミュニティ・スクール」「地域連携・協働カリキュラム」「社会に開かれた教育課程」「学校を核とした地域づくり」「地域とともにある学校づくり」

### 1 主題設定の理由

#### (1) 現代社会の要請から

社会のグローバル化や情報化、技術革新が急速に進み、将来を予想することが困難な時代になっている。教育課程企画特別部会「論点整理」(平成27年8月)では、「社会の変化に目を向け、教育が普遍的に目指す根幹を堅持しつつ、社会の変化を柔軟に受け止

めていく」教育のために「社会に開かれた教育課程の実現」が提唱された<sup>1)</sup>。中教審答申「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について」(平成27年12月)では、これからの学校と地域の目指すべき連携・協働の姿の一つに「学校を核とした地域づくり」

が示されている。また、地域社会の人々と目標やビジョンを共有し、地域と一体となって子どもを育む「地域とともにある学校」へ転換し、「社会総がかりの教育」を実現するために、全ての公立学校がコミュニティ・スクールとなることを目指して、取組を一層推進・加速することが提言されている。さらに、「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」の改正(平成29年4月1日施行)により、コミュニティ・スクール設置が努力義務化された。同法改正により、全国のコミュニティ・スクール設置校は、令和2年7月1日現在9,788校(前年比2,187校増)、うち福岡県は324校(前年比71校増)と、急速に進展していることが分かる(表1)。

表1 コミュニティ・スクールの導入・推進状況について

基準日	設置校数	増加数(前年比)	学校設置者数
平成30年	5,432校	1,832校増	18道府県
令和元年	7,601校	2,169校増	22道府県
令和2年	9,788校	2,187校増	29道府県

文部科学省「コミュニティ・スクール 地域とともにある学校づくりのために」(平成29年)では、コミュニティ・スクールの魅力について「学びや体験活動の充実」「学校を中心とした地域ネットワークの形成」など多くの成果が報告されている。しかし、広瀬(2012)は、「一般教員の関心が低い」ことなどを課題としてあげ、「委員の選定、会議の日程調整、資金不足や教員の多忙化等々は、深刻な問題となっており、そのことが学校運営協議会の形骸化に拍車をかけている」<sup>2)</sup>と指摘している。

## (2) 宗像市と在籍校の実態から

在籍校である宗像市立日の里西小学校は、日の里東小学校、日の里中学校の2小1中を合わせて「日の里学園」と呼び、平成18年度より施設分離型小中一貫教育を推進している。そのような中、宗像市教育委員会は、「宗像市教育大綱」(平成31年)において、「自立しかかわりを深める子どもの育成～家庭・地域と協働した学校づくり～」の重点施策として、令和元年度からコミュニティ・スクールの導入による、「地域とともにある小中一貫教育」のさらなる充実を掲げ、在籍学園はそのモデル校となった。学校と地域が連携・協働したカリキュラムは、総合的な学習の時間における「日の里まつりもりあげ隊」や「花いっぱい運動」などがあり、学園コーディネーターを中心に単元開発や地域との関係づくりが行われてきている。しかし、在籍学園教員への意識調査では、子どもを育てるために、学校と地域の連携の必要性は感じているものの、「コミュニティ・スクール導入によって何

が変わるのか」「時間外勤務が増えるのではないかな」などの不安が大きいことが分かった。以上のことから、教員の意識変容を図りながら、学校と地域の実態をふまえ「地域とともにある学校」へ進化させていく必要があると考えた。

## 2 研究主題・副題の意味

(1)「学園小中一貫コミュニティ・スクール」とは学園内2小1中それぞれの学校に学校運営協議会を置くのではなく、三校で一つの「学園運営協議会」を設置し、地域とともにある小中一貫教育を推進している学校のことである。

(2)「地域連携・協働カリキュラム」とは



図1 学校と家庭・地域との連携(協働)関係

森(2013)は、学校、家庭、地域との連携・協働関係には、「支援活動」「貢献活動」「協働活動」の三つがあると整理し、この三つの活動軸によって、学校、家庭、地域のそれぞれが役割を分担し、三者の「対等性」と「双方向の関係」が構築されると主張している<sup>3)</sup>(図1)。また、「論点整理」において、「社会に開かれた教育課程」について以下のことが重要になるとされている<sup>1)</sup>(表2)。

表2 「社会に開かれた教育課程」の重点

- ①社会や世界の状況を幅広く視野に入れ、よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を持ち、教育課程を介してその目標を社会と**共有**していくこと。
- ②これからの社会を創り出していく子供たちが、社会や世界に向き合い関わり合い、自らの人生を切り拓いていくために求められる資質・能力とは何かを、教育課程において**明確化**し育んでいくこと。
- ③教育課程の実施に当たって、地域の人的・物的資源を活用したり、放課後や土曜日等を活用した社会教育との連携を図ったりし、学校教育を学校内に閉じずに、その目指すところを社会と**共有・連携**しながら実現させること。

(下線は研究者による) 「論点整理」より

以上のことから、「地域連携・協働カリキュラム」の条件を以下にまとめる(次項表3)。

表3 「地域連携・協働カリキュラム」の条件

- ①学校と家庭、地域の「対等性」「双方向性」の関係を基盤としていること
- ②よりよい学校教育を通じて、よりよい個人と社会をつくるという目標を「共有」していること
- ③地域の資源(ひと、もの、こと)を教育活動に取り入れ、教育活動を学校内に閉じずに、地域社会と「連携・協働」していくこと

本研究においては、生活科、総合的な学習の時間の単元のうち、日の里地区の教育資源を生かした単元について、9年間の系統を整えた「日の里カリキュラム」を構築していく。

(3)「地域連携・協働カリキュラム・マネジメントの推進」とは

図1において、学校、家庭、地域との連携・協働関係には、「支援活動」「貢献活動」「協働活動」の三つの活動軸が重要であると述べた。「カリキュラム・マネジメントの推進」とは、この三つの活動が組織的、効率的に行えるような組織編成とPDCAサイクルを確立しながら、教育活動の質の向上を図っていくことである。本研究においては、「日の里カリキュラム」が位置づく「協働活動」を中心に、研究者と日の里学園コーディネーターとで連携してマネジメントを行う。

### 3 研究の目的

地域連携・協働カリキュラム・マネジメントの推進を通して、学園小中一貫コミュニティ・スクールの導入期の在り方を究明する。

### 4 研究の仮説

地域連携・協働カリキュラムの構築と機能化を図るための組織編成や実働化に向けたPDCAサイクルを確立するマネジメントを行えば、「地域とともにある学校づくり」と「学校を核とした地域づくり」の好循環を生み、学園小中一貫コミュニティ・スクールを推進することができるであろう(図2)。

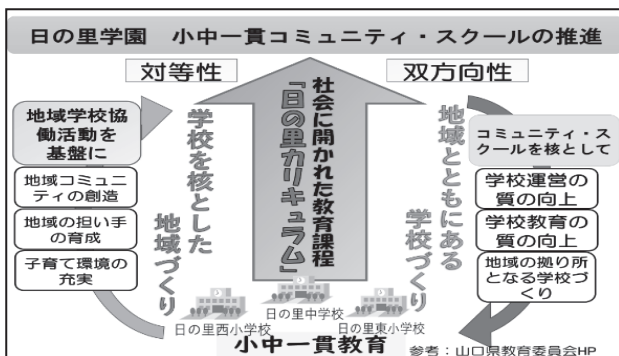


図2 コミュニティ・スクール推進のイメージ図

### 5 仮説説明のための具体的方策

- (1) 地域のニーズ調査と学校の方向性の確立(R)
- (2) 目標の共有化(V)
- (3) 目標を達成するカリキュラム・デザイン(P)
- (4) 組織体制・実働組織づくり(P)
- (5) 実働組織を中心とした実践(D)

(1)～(5)は図3と対応。ただし、図3の(6)実働組織の見直し・次年度の活動計画については未実施のため本研究ではふれない。

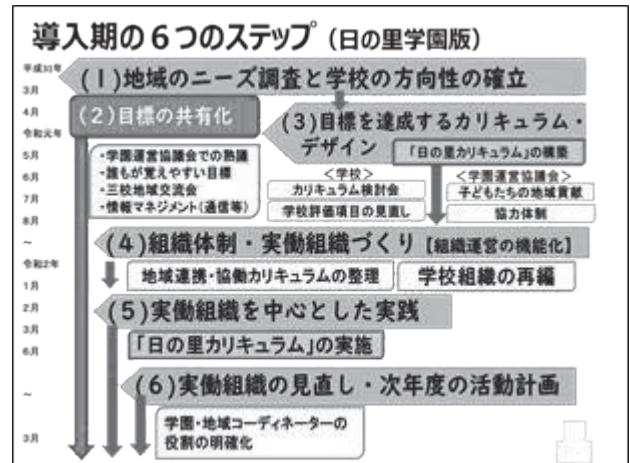


図3 日の里学園版 導入期の6つのステップ

### 6 研究の実際

- (1) 地域のニーズ調査と学校の方向性の確立(R)

#### 【1 年次】

- ①地域のニーズ調査 - 高齢化と団地の老朽化 -

調査時期：令和元年5～7月

対象者：日の里地区コミュニティ運営協議会(以下日の里コミセン)事務局長, Cocokara 日の里館長

日の里コミセンには、4部会と19構成団体、3特別委員会があり、子どもや高齢者の日常的な見守りや、地域行事に参加する大人を増やす活動など、熱心な取組が多数行われている地域であることが分かった。また、50年前に西日本最大規模の団地が建てられ、短期間に多くの人が移り住んできた地域になる。そのため、宗像市の中でも高齢化率が非常に高く(平成31年現在35.2%)、世帯構成員の平均も二人を下回る地区があり、一人暮らしの老人・高齢者夫婦世帯が多い地区である。また、毎年夏に行われている「日の里まつり」も、企画運営に携わる人の高齢化、地域住民の参画意識の低さから、まつりの規模を縮小せざるを得ない状況にあるなどの課題があることが分かった。さらに、団地の老朽化や活気がない大通り、商店街を何とかしようと、行政、企業、地域団体による様々な取組が行われていることも分かった。



## ②学園のカリキュラム調査

調査時期：令和元年5～7月  
対象：日の里西小、日の里東小、日の里中学校の生活科、総合的な学習の時間の内容

学校と地域が連携・協働したカリキュラムが各学年にどれくらいあるのか調査した結果、両小学校のカリキュラムは十分共有されておらず、ゲスト・ティーチャ（以下 GT）や協力団体もバラバラであること、中学校では地域と協働した単元がそもそも少ないことなどの課題が明らかになった。施設分離型の小中一貫校において、カリキュラムこそが教員間をつなげる重要な役割を果たすとともに、教員のコミュニティ・スクールに対する意識の変容も期待できると考えた。

## ③学校の方向性の確立-学校、家庭、地域の共通目標の設定-

平成30年3月に行われた「日の里学園コミュニティ・スクール準備委員会」では、日の里学園の子どもたちをどう育てていくかについて熟議された。その際、家庭、地域の代表の方から「積極性が育つよう、家庭でも地域でも自分たちで考える場を与えたい」という意見があった。学校の、「思考力・判断力・表現力」をつけさせたいという願いと同じであることが分かった。それを受けて、日の里学園の共通目標「自分で考え、自分で行動する子どもの育成」が設定され、第1回学園運営協議会（令和元年6月10日）で承認された。

### (2) 目標の共有化(V)

PTA 主催で行われている「三校地域交流会」には、三校の教員、保護者、地域が参加し意見交換を行っている。本年度のテーマを「自分で考え、自分で行動する子どもを育てるために」と設定してもらい、ワールドカフェ方式で交流を深めた（参加者 135 名）（資料1）。その中で、

「自分で考える子どもを育てるためには、大人が子どもの失敗を見守ろう」という意見が多く出された。共通目標を多くの人に周知するとともに、当事者としての意識作りのきっかけになったと考える。

### (3) 目標を達成するカリキュラム・デザイン(P)

①教員の三校合同研修会における生活科、総合的な学習の時間の見直し(Plan)

教員の地域課題への関心を高め、当事者意識を向

上させることを目的に、ワークショップによる研修を企画した。まず、地域の実態や学校のカリキュラムの課題についてプレゼンを作成し提示した。次に、9年間の生活科、総合的な学習の時間のカリキュラム一覧表と各学年の「日の里カリキュラム」の計画案を模造紙に貼り、意見を自由に書き込んでもらえるように工夫した。また、学年部（西東小合同）に分かれ話し合う際には、地域の教育資源などの情報提供を行ったり、学年間のつながりに意識が向くように声かけを行ったりした（資料2）。



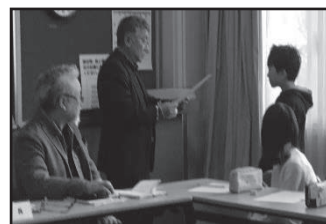
資料2 「日の里カリキュラム」見直しの様子

（令和元年7月30日）

中学校では、「日の里カリキュラム」に意欲的な姿勢が見られた。自由記述からも「地域の現状を知る機会がないので、それを学ぶ研修があってもいいのでは」という提案があり、学校と地域の双方向の意見交換の必要性が出されたことは大きな成果だと感じる。小学校では、各校で取り組んでいる内容を交流し、地域の課題や目標を考慮して話し合う姿が見られた。特に「高齢化問題」「日の里まつり」を題材とした二単元について、学年部の枠を超えて議論を行い、9年間の系統を意識している姿が見られた。

### ②カリキュラムの一部遂行と振り返り(Do・Check)

5年担任は、三校合同研修会において話し合われた内容をすぐに実践に移した。これまで、6年(1学期)の単元だった「日の里まつり」に関する内容を、5年(12月)に繰り下げ、6年1学期まで継続して実施することにした。これまでのように、短期間でできることをするのではなく、長期計画のもと、地域の活性化のために試行錯誤しながら課題解決に取り組むことで、「自分で考え、自分で行動する子ども」の育成が図れると考えたからだ。教師のこの発想がコミセン会長の「地域を活性化させたい」「日の里まつりのアイデアが欲しい」という願いと結びつき、地域主催の「日の里まつりプロジェクト」が立ち上がった（資料3）。そして、「子ども実行委員」の募集があり、5年児童（各校6名）が参加し、学



資料3 「日の里まつりプロジェクト」子ども実行委員の任命式の様子



資料1 三校地域交流会の様子

（令和元年7月2日）

級で話し合ったアイディアを地域の会議で提案した。このように、一部実施した単元については、その成果と課題を整理し、振り返りを行った。また、今後、地域と一緒に取り組んでいきたい内容(要望)などを書き出してもらい、それらを、学園運営協議会(令和2年1月10日)において協議することを教員へ伝えることで、学園運営協議会に参加しない教員の参画意識を高めることにした。

#### ③三者会における「日の里カリキュラム」原案の検討(Action)

地域の実態と教員が検討したカリキュラムをもとに、「日の里カリキュラム」の原案を作成した。それを三者会(校長、教頭、主幹3名ずつ、学園コーディネーター)において再検討し、「日の里カリキュラム」の大きな柱が、「郷土愛」「活性化」「高齢者福祉・防災」に決まった。「日の里カリキュラム」に対する学園の方向性が明らかになるとともに、管理職間での共有化を図ることができた。また、学校の一方の願いではなく、学校と地域がともに作るカリキュラム(社会に開かれた教育課程)になるためにはどうしたらよいかが話し合われた。そこで、第4回学園運営協議会において、「日の里カリキュラム」を熟議の柱とし、「目指す地域像」「地域の教育資源の情報」「協力体制」について学校と地域がともに考えを出し合うことが決まった。

#### ④学園運営協議会における「日の里カリキュラム」についての熟議(Plan)

まず、「目指す地域像」について、地域代表が述べた内容を以下に示す(資料4)。

- ・日の里祭りなどで子どもたちの考え(アイディア)が活かされる元気なまちにしたい。そして、就職してどこか違うところに住んでも、日の里がふるさと だと思えるまちにしたい。
- ・子どもは地域の宝。だから、地域のみんなで子どもを育てるまちにしたい。そのためには、つながりが大事。大人も子どもも、生き生きと活躍できるまちにしたい。

資料4 どのような地域にしたいですか(目指す地域像)  
それを受けて、主幹が各学年の学習内容を簡単に伝え、内容や方法についての意見交換を行った。

日の里の歴史を学ぶ学習(3年)では、5年前に地域で行われた「宝探しin日の里」の情報が出された。「ウォークラリー形式で実際に地域を歩くことで、子どもたちの仲間意識も育った」という意見とともに、「安全のための見守りは地域がしよう」という提案があった。また、「日の里まつり」に関する単元は、まちの「活性化」のための重要単元であるとして、4年生から取り組んでいくことが確認された。さらに、「高齢者福祉・防災」は、高齢者福祉の学習の一環で民生委員体験を行うことで、災害時に高齢者宅へ声

かけに行ったり、一緒に避難したりすることができ子どもを育てられることが話し合われた。そして、学校と地域の合同防災訓練についても多くの意見が出された。それらの意見を集約して「日の里カリキュラム(案)」を作成することができた(図4)。

後期	【活性化】	
	8年：ワクワクWORK 6年：日の里もりあげ隊プロジェクト 5年：6年生へのステップ	【高齢者福祉・防災】 9年：安心・安全のまちづくり 7年：だれもが住みよい日の里に 6年：日の里見守り隊プロジェクト 5年：考えよう！年をとるって？
中期	4年：花いっぱいもりあげ隊、廃品回収もりあげ隊、日の里まつり調べ隊	
前期	【地域を知る、ふれ合う】	
	3年：発見！日の里の「たから」たんけん隊、発見！日の里の「れきし」たんけん隊 2年：春の町ではっけん、花ややさいを育てよう、生きるってすごい、まちの人につたえたい 1年：いくぞがっこうたんけん、あきとなかよし、ふゆとなかよし	

図4 「日の里カリキュラム」の案

#### (4)組織体制・実働組織づくり(P)【2年次】

「日の里カリキュラム」の編成に伴い、2年次は共通目標の一部が変更され、「地域を愛し、自分で考え自分で行動する子どもの育成」に決まった。また、「日の里カリキュラム」以外の「地域連携・協働カリキュラム」を把握するために、日の里学園における、子どものための活動(「支援活動」「貢献活動」「協働活動」)にはどのようなものがあるのか、また、学校、家庭、地域のどこが主催(または協働)で行っているか整理した(図5)。

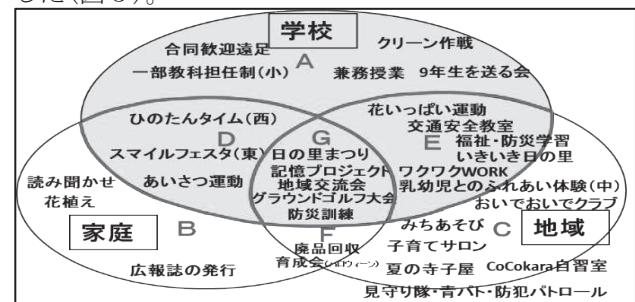


図5 「日の里カリキュラム」以外の地域連携・協働カリキュラムを整理したもの

そして、図5のD(学校と家庭の協働)E(学校と地域の協働)G(三者の協働)にあたる部分を組織的、効率的に行っていくための組織が必要になると考え、「教育支援部」「地域貢献部」「協働部」という、サポート部(地域学校協働体制)を立ち上げ、さらに、その機能化を図るためのサポート本部(事務局)と各校の連絡調整役としてCS推進担当を校務分掌上に新たに設けた。また、各サポート部には、学校、保護者、地域の各代表者の名前を入れることで、役割を明確にした(次項図6)。これを、全職員へ周知するために、三校合同職員会議(令和2年4月2日)において、校長部、教頭部、主幹部と協働で説明資料を作成し、説明会を行った。さらに、第1回学園運営協議会(令和2年6月10日)においても、学園経営方針とサポート部について承認を得ることができた。



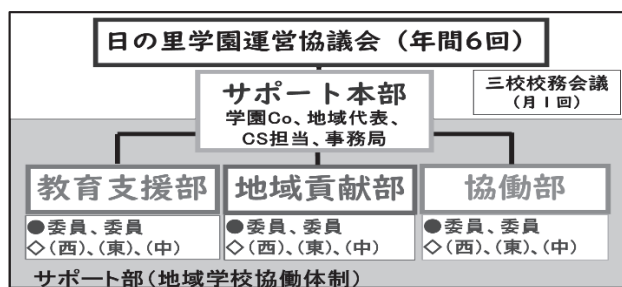


図6 サポート本部とサポート部

(5) 実働組織を中心とした実践(D)

## ①「日の里カリキュラム」の実践(Do) (1 学期)

学 年：3 年(日の里西・東小)  
 教 科：総合的な学習の時間  
 単 元 名：「発見！日の里の『たから』たんけん隊」  
 探究課題：「子どもが参加できる地域行事とそれを支える人々」

## ア サポート部への連絡調整・推進

2 小が同じ内容の学習を進めていくために、両校の担任が単元の流れや目標について共通理解を図る時間を設定した(表4)。

表4 サポート部の打ち合わせの概要

日時	内容	メンバー
6 月 1 日(月) 16:30～東小	学習過程について	3 年西東担任、研究者
6 月 8 日(月) 16:00～西小	単元目標について	3 年西東担任、指導主事、主幹

## イ 地域資源の調査、GT と担任への連絡調整

担任の要望を受け、子どもが参加できる地域行事とそれを支える人々についての調査を行い、GT や担任への連絡調整を行った(表5)。

表5 地域資源の調査・整理・連絡調整の概要

日時	内容
6 月 4 日(木)	日の里コミセン事務局長、CoCokara 日の里館長への聞き取り調査
6 月 8 日～ 12 日	地域行事(14 個)と GT(11 名)の整理 GT への依頼の電話、GT が来る日の調整 2 小の進捗状況の把握と連絡
6 月 29 日～ 7 月 8 日	GT へ質問内容やインタビュー当日の詳細を説明
7 月 10 日(金)	インタビュー当日の運営(コロナ対策も含む)

単元の途中で、国語科と関連させるなどの担任の創意工夫が生まれた。2 小には同じ GT が来るため、GT への依頼や学習後のお礼の手紙を書くなどの取組がそろえられるように、両校の進捗状況を伝えるようにした。また、インタビュー当日の GT の受付などの運営面のサポートも行った。

## ウ 事前事後アンケートの実施と振り返り

学習の評価・改善のために、共通目標「地域を愛し、自分で考え、自分で行動する子ども」の評価指標である学校評価項目と照らしてアンケートを作成、実施した。また、インタビュー当日は、GT に授業の感想

を交流してもらう時間を設定し、その様子をビデオ編集した。それを、児童の学習の振り返りで使うことで、「子どもたちの笑顔を増やしたい」「子どもたちの記憶に残ることをしたい」「みんなで支え合える日の里にしたい」などの地域の方の願いを再確認できるようにした。

## ②教員の小小合同研修会(Check・Action)

「日の里カリキュラム」とコミュニティ・スクール推進が、どのようにつながっているのかを共有する研修会を企画、実践した。1 学期の実践を担当より発表してもらい、事前事後の児童の変容や、GT の感想(資料7)などを紹介した。

- ・子どもの質問によって、学校や地域の役に立ちたいという思いが引き出された。この学習を通して CS を学べた。今年度活動が少ない PTA を巻き込んだ企画をしていきたい。【参画意識の向上】
- ・子どもたちと一緒に準備したり思いを取り入れたりして企画をやりたい。【共育意識の向上】【地域の教育力の向上】

資料7 GT の感想(3 年生の学習後)

紹介にあたり、「日の里カリキュラム」の実践が、教育活動の充実と地域の教育力の向上の双方に効果があることや、「地域とともにある学校づくり」と「学校を核とした地域づくり」の好循環を生むこと、子どもの成長をともし見守り支える「共育文化」の重要性などが伝わるように留意した。

## ③「日の里カリキュラム」の実践(Do) (2 学期)

学 年：8 年(日の里中学校2 年)  
 教 科：総合的な学習の時間  
 単 元 名：「日の里のくらしバージョンアッププロジェクト」  
 探究課題：「日の里のまちづくりに取り組んでいる人々や組織」(まちづくり)

## ア サポート部への連絡調整・推進

日の里地区の都市再生事業に、行政と企業が連携して取り組んでいる企画についての情報を得た。そこで、学園の子どもたちがまちづくりに参加する単元開発ができないかと考え、地域、企業とのまちづくり検討会議(資料5)を開き、生徒がどのように関わられるかを検討した(次項表6)。



資料5 地域・企業とのまちづくり検討会議の様子

表6 サポート部の打ち合わせの概要

日時	内容	メンバー
6月19日(金) 15:00～ Cocokara 日の里	地域・企業とのまちづくり検討会議①	学園 Co, 研究者, 企業, 地域住民
7月13日(月) 12:00～西小	地域・企業とのまちづくり検討会議②	学園 Co, 研究者, 企業, 地域住民
8月6日(木) 16:00～中学校	学習過程, 目標について	8年担任, 主幹, 指導主事, 研究者
9月13日(日) 9:00～日の里 コミセン	具体的な単元構想とそれぞれの役割分担	8年担任, 教頭, 主幹, 学園 Co, 指導主事, 研究者

イ 企業・市役所・地域と担任をつなぐコーディネーターの役割

学園コーディネーターと協力し、企業や地域の方の思いや願いなどを、学園の窓口として調査し整理を行った。それらを学校長や担任に伝え、学習の目標や時数を考慮して、生徒に出会わせたい「ひと・もの・こと」を絞り込んでいった。担任が実際に授業を進めることができるまでの準備や連絡調整を行い、授業がスムーズに進行するようになってからは、担任に任せるようにした。その間、授業の様子を取材し、次年度への記録を残すとともに、学習後には、アンケート結果の分析と学習の成果を発信するようにした。生徒は、行政、企業、地域の方々(計30名)が参加して行われた提案式において、日の里の暮らしをよりよくするための提案をパワーポイントや企画書等にまとめてプレゼンを行った(資料6)。



【生徒の感想】私は、この学習を通して、日の里の課題や普段は考えない日の里の良さを知ることができた。みんなで協力して、必死で、「こんなことをやりたい!」と企業の人にアピールできたし、中学生の思いをこんなに真剣に聞いてくれて、とても嬉しかった。これからの日の里は自分らでつくっていかないといけないと思った。

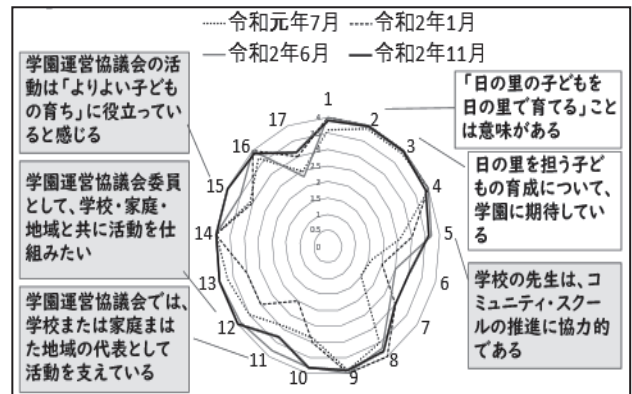
資料6 提案式当日の様子と生徒の感想

生徒の提案は、企業や地域の方々に引き継がれ、今後は地域での活動として実現される予定である。学習後も、生徒の地域での活動は続いていったため、その連絡調整等を行うようにした。

## 7 全体考察

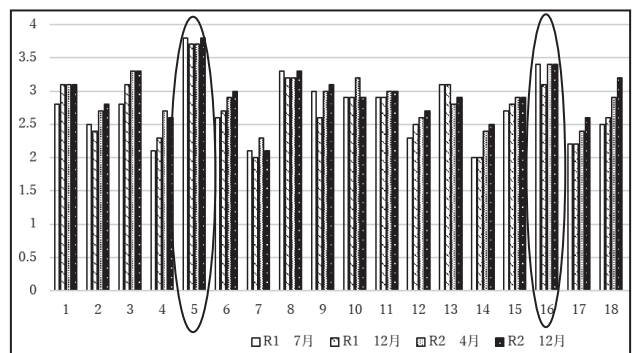
### (1) 学園運営協議会委員の当事者意識の変容

4回のアンケートを実施した。アンケート結果から、当事者意識が向上していることが分かった。特に、項目5〔状況把握〕, 11〔役割自覚〕, 12〔連携企画力〕, 15〔意義自覚〕の伸びが大きいことが分かる(図7)。これは、「日の里カリキュラム」構築のための熟議や、実施の報告を中核に据えた運営協議会の在り方が有効であったと考える。


図7 当事者意識に関するアンケート結果の変容  
(17項目 1年次7,1月 N=12 2年次6,11月 N=10 4件法)

### (2) 教員の地域連携・協働に関する意識の変容

4回のアンケートを実施した。相対的に高い数値だった項目は、5「子どもを育てるためには、地域と学校の連携が必要だ」、16「子どもの教育(学力や生活指導等)に関して、地域の教育力を活用したい」である(図8)。地域連携の必要性を感じ、地域の教育資源を活用したいと思っている教員が多いことが分かる。


図8 地域連携・協働に関するアンケート結果の変容  
(18項目 1年次7,12月 N=68 2年次4,12月 N=52 4件法)

また、教員の地域連携に対する期待や不安の自由記述を、KH Coderでテキストマイニング分析をし、以下のような共起ネットワークを作成した(次項図9, 10)。図中のグループごとに囲んだ楕円は研究者が追加したものである。

1年次の教員の自由記述には、2つのグループが存在していることが分かる(次項図9)。どちらのグ



ループも、地域連携の必要性を感じつつも、漠然とした不安があることが分かった。

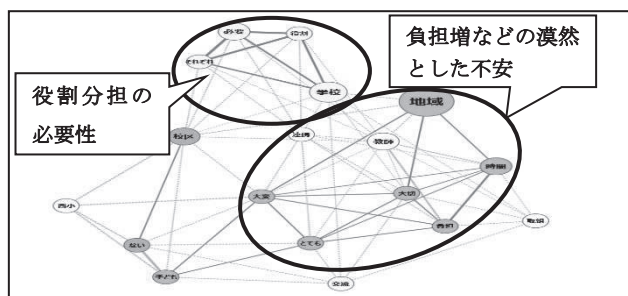


図9 教員の地域連携に対する期待や不安(令和元年12月)(N=68 うち記述者12人, 総抽出語数351)

2年次には、記述者(12→37人)、記述量(総抽出語数351→1590)が増え、地域連携に対する関心の高まりとともに、A～Fの6つのグループが存在していることが分かる(図10)。

グループA・B・Fは、カリキュラムの充実による成果とともに、カリキュラム改善やCS推進担当の在り方、時間外勤務への配慮などに言及したグループである。1年次の漠然とした不安から具体的な課題へと変化していることが分かる。グループC～Eは、地域の方への感謝、学力向上への期待、子どもの姿の変容、地域愛と地域貢献に言及したグループであり、成就感や達成感、コミュニティ・スクールの有効性を感じていることが分かる。これは、地域と連携・協働した「日の里カリキュラム」の構築と実践が有効であったと考える。

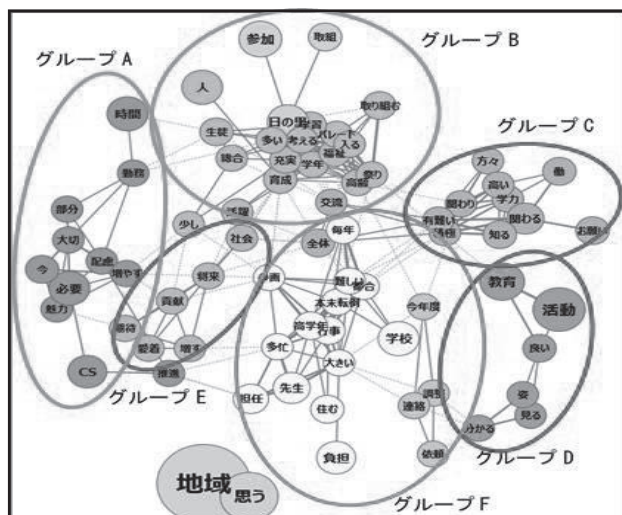


図10 教員の地域連携に対する期待や不安(令和2年12月)(N=52 うち記述者37人, 総抽出語数1590)

## 8 成果と課題

### 【成果】

社会に開かれた教育課程を目指す「日の里カリキュラム」の構築と、機能化を図るための組織編成や実働化に向けたPDCAサイクル(6つのステップ)を確

立したマネジメントを行ったことで、学園運営協議会委員の当事者意識の向上と教員の不安軽減、地域連携・協働に関する意識に向上が見られた。

### 【課題】

○地域連携・協働カリキュラムの継続、充実を図るための組織編成の再考

○保護者や地域住民の当事者意識の向上のための取組(環境の充実、啓発活動など)の工夫

### 主な引用・参考文献

- 1) 文部科学省 2015 教育課程部会 論点整理 3-4項 [https://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2015/12/11/1361110.pdf](https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2015/12/11/1361110.pdf) (参照日 2019/12/10)
- 文部科学省 2015 中央教育審議会 新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について(答申) [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2016/01/05/1365791\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/01/05/1365791_1.pdf) (参照日 2019/12/10)
- 文部科学省 2017 地方教育行政の組織及び運営に関する法律 第47条の5 条文解説 [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/community/suishin/detail/1313081.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/community/suishin/detail/1313081.htm) (参照日 2020/12/3)
- 文部科学省 2020 コミュニティ・スクールの導入・推進状況 [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/31/10/1422294\\_00001.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/31/10/1422294_00001.htm) (参照日 2020/12/3)
- 文部科学省 2016 コミュニティ・スクール 地域とともにある学校づくりのために
- 2) 広瀬隆雄 2012 コミュニティ・スクールの現状と課題について - 学校運営協議会の役割を中心に - 桜美林論考, 心理・教育学研究雑誌 3 17-35 29項 [https://obirin.repo.nii.ac.jp/index.php?active\\_action=repository\\_view\\_main\\_item\\_detail&page\\_id=13&block\\_id=34&item\\_id=1151&item\\_no=1](https://obirin.repo.nii.ac.jp/index.php?active_action=repository_view_main_item_detail&page_id=13&block_id=34&item_id=1151&item_no=1) (参照日 2019/12/3)
- 3) 森保之 2013 学校と家庭・地域の三者が共に進めるコミュニティ・スクールの実践的研究(Ⅱ) - 8年間関わって見えてきたこと - 福岡教育大学紀要第62号 第4分冊 169-182 172項
- 森保之 2007 研究発表「共学・共育風土を醸成させる地域運営学校(コミュニティ・スクール)日の出小学校の実践(文科省:「平成19年度コミュニティ・スクール推進フォーラム」)
- 宮原仁美 2013 コミュニティ・スクール創設期の研究 - 当事者意識を養う熟議を重視した場の工夫を通して - 福岡教育大学教職大学院